

第2回

ハーベスト再臨待望聖会

日本の覚醒

ユダヤ人の救い

メシアの再臨

「大患難時代」

— サタンの策略と神の恵み —



ノアム・ヘンドレン（イスラエル聖書大学教授）

通訳：中川健一

ハーベスト・タイム・ミニストリーズ

はじめに

中川健一

1. ハーベスト・タイムの方向転換

- (1) 昨年(2019年)の3月末をもってテレビ伝道を終了し、新しい歩みを開始した。
- (2) 「第1回ハーベスト再臨待望聖会」の祝福
 - ①参加者数：3会場合計で1,700名以上
 - ②ヘンドレン師は3回にわたって人類救済計画の全貌を語ってくださった。
- (3) 第2回ハーベスト「再臨待望聖会」
 - ①沖縄(3月16日)
 - ②大阪(3月18日)
 - ③東京(3月21日)

2. 祈りのテーマ

- (1) 相互に関連した3つのテーマ
 - ①日本のリバイバル
 - ②ユダヤ人の救い
 - ③メシアの再臨
- (2) これは「三大祷告」として知られている。
- (3) 日本(日本国)の場合は、リバイバルではなく霊的覚醒(目覚め)である(awakening)。
 - ①日本に霊的覚醒が来ようとしている。
 - ②ユダヤ人に霊的覚醒が来ようとしている。

セッション1 「終末預言と神の諸契約」

ノアム・ヘンドレン

通訳：中川健一

メッセージ：終末預言の出来事は、それぞれが独立したものではなく、また（私たちの好奇心を満足させるために）たまたま前もって知らされているものでもない。それは、地上に「神の国」を打ち立てるとする神のプログラムがピークを迎えるクライマックスの時である。そして、そうした終末預言は、信者に希望と忍耐を与え、神に仕える原動力となるようにみことばに啓示されているのである。

イントロダクション

1. 神が、特にイスラエルと、また人類一般とどのようにかかわりを持つかを規定した聖書的契約として、主なものが4つある（名称と数は人によって違う可能性がある）。
2. この4つの契約が、神がこの世界とかかわりを持つ時に常に適用されるルール、枠組みである。その枠組みは、過去の歴史においても、将来の預言についても変わらない。
3. この4つの契約を理解することで、将来に何が起こるのか、そしてそれがなぜ起こるのかを正確に見分けることができるようになる。

1. アブラハム契約は、神の計画の最終目標であり、要（かなめ）である（創12：1～3、15：1～21、17：1～8）。【神のプログラムの「What（何）」の側面】

- A. 預言に示された神の計画の最終目標は、全人類の祝福である。つまり、完全な者とされた人類が神と交わりを保ち、神の完全な世界を楽しむことである。
1. 創1～2章：これが天地創造時に元々あった理想的な世界である（特に、創1：26～28、31）。
 2. 創3～11章：アダムの罪で人類と世界が墮落し、神の理想的な世界がだいなしになった。
 3. 創12章：アブラハム契約には、万物を元通りに回復するための神の計画が啓示されている。
 - a. 全人類に対する祝福を回復するという約束（12：3b）

- b. 祝福の内容：物質的、霊的世界がエデンの園の時の状態に回復する（参照：イザ 11 章、ロマ 8：16 以降、詩篇 8 篇）。
 - c. この祝福された状態の名称が、地上における「神の国」 — 「完全な人」を介した神の支配 — である（参照：マタ 6：10 の「主の祈り」）。
- B. 預言に示された神の計画が成就するための要（かなめ）は、イスラエルが約束の地で祝福を受け、全世界に祝福を届ける管（くだ）となることである（創 12：1～3）。
 - 1. イスラエルに約束されている祝福は以下の3つである。
 - a. 土地 — カナンの地。イスラエルに約束された相続地（参照：創 15：18～21）
 - b. 子孫 — アブラハムから出てくる「大いなる国民」（参照：創 15：1～5）
 - c. 祝福 — 民族全体が神と完全な霊的関係を持つようになること（参照：創 17：6～8、出 6：7）
 - ※ 上記の約束がひと時にすべて成就したことは一度もない。
 - 2. イスラエルに約束されている祝福が、イスラエルが神の祝福の通り管となる基（もと）である（創 12：2～3）。
 - 3. そのため、イスラエルが約束の地の全土を所有し、約束されていたすべての祝福を味わうようになって初めて、全世界への祝福が実現する（参照：ロマ 11：11～15、エゼ 36：24 以降 — イスラエルの約束の地への回復と、民族全体のきよめが千年王国の始まる第一段階）。

II. トーラー契約（モーセ契約）は、イスラエルが祝福を受ける（つまり全世界が祝福を受ける）ための前提条件とタイミングを教えている。【神のプログラムの「When（いつ）」の側面】

- A. イスラエルは、民族全体として神に全（まった）き献身をする時に初めて、約束されている祝福を体験する（出 19：5～6、レビ 26：3、4、9、12、申 28：1～14。参照：創 17：6～8）。【＝前提条件】
- B. 神は、イスラエルが悔い改めて、神に全き献身をするようになると約束している（申 4：30）。

1. 「後の日」に。つまり、今の時代の終わりの時に。
2. 神の裁きの結果として（「苦難（患難）」）。参照：エレ 30：7、23～24、申 30：1～3、5、4：30、レビ 26：18、21、23、27)

※ イスラエルの最終的な悔い改めと、神に全き献身をするようになるという預言は必ず成就する。それは、（無条件契約である）アブラハム契約が成就する必要があるためである。

Ⅲ. ダビデ契約は、「神人」であるメシアが、祝福をイスラエルならびに全世界に届ける器となることを啓示している。【神のプログラムの「Who（だれ）」の側面】

- A. 神はダビデに、永遠に続く王朝と王国を約束された（Ⅱサム 7：11～16）。
- B. 神は、ダビデの子であるメシアが「神である王、祭司」となり、イスラエルを贖（あがな）い、地上に神の国を回復すると約束された（Ⅰ歴 17：11～14、17、イザ 9：1～6 = 征服者、11：1～10 = 統治者、イザ 49：5～6 = 贖い主。参照：ルカ 1：69～75）。

※ そしてメシアが、地上にある神の国を統治する「完全な人」となる。

Ⅳ. 新しい契約は、イスラエルが聖霊によって変えられ、民族的な悔い改めをし、神の要求にかなう完全な義をまとうようになることで、神の国の祝福を受け取ることを約束している。【神のプログラムの「How（どのように）」の側面】

- A. 新しい契約は、聖霊がイスラエル民族の心を入れ替え、神への全き献身へと導くと啓示している（エレ 31：30～33、エゼ 36：24～28）。
- B. 聖霊は、イスラエルを民族的悔い改めとメシアに対する信仰へと導くことでこの働きを始める（ゼカ 12：10。参照：ホセ 3：5 = 再臨）。
- C. そのようにして、イスラエルが祝福を受け、約束の地に再び集められることで、イスラエルが自分に与えられた役割を果たせるようになり、神の祝福を全世界に届ける器となる（ゼカ 13：1、イザ 59：21～60：3）。

結論

1. 終末預言の出来事はすべて上記の4つの契約に関係しており、この4つの契約を成就するために起こる。そして、それは地上に神の支配を実現すること（御国の到来）につながる。
2. 地上に神の国を実現させるための鍵をイスラエルの悔い改めが握っているため、終末預言の出来事はユダヤ民族と、ユダヤ民族を悔い改めに導くための神の働きに集中している。神がユダヤ民族を悔い改めに導くのは、ご自身がユダヤ人に与えた約束、またユダヤ人を通して実現すると語った約束を成就させるためである。

セッション2「大患難時代にサタンが達成しようとする目的」

ノアム・ヘンドレン

通訳：中川健一

はじめに：サタンは、墮落した時から今日に至るまで、神とその計画、その民に敵対する勢力として活動してきた。しかし、終わりの時が近づくと、サタンの敵対行為はこれまで以上になりふり構わないものとなり、その激しさを増していく。

I. サタンの目的は、地上に神の国が到来することを妨げることである（創1～3章）。

- A. 神は元々、完全な人類を通してこの世を治めようと計画しておられた（創1：26～28を読む）。
「神のかたち（イメージ）につくられた人が、神の代理人としてこの世を治める」
- B. エデンの園での誘惑は、神の国を打ち立てるといふ神のプログラムを破綻に追い込むためのサタンの策略だった（創3：1～7）。人類が罪を犯した時に、人の内にある神のかたちが汚され、人はこの地を治める資格を失った。
- C. 神は、サタンが手にした勝利をメシアによって奪い返そうとされた（創3：15を読む）。
「神人が、地上に神の国をもう一度打ち立てる」

（サタンが達成しようとする**目的**を理解することで、サタンの行動の背後にある動機を知ることができる。また、サタンの**策略**をあばくことで、サタンに打ち勝つ方法を学びとることができる。）

II. サタンは、初臨の時にメシアに打ち勝つことができなかった。そのため、現在のサタンの策略は再臨の実現を妨げることである（黙12：1～5、12～17）。

- A. かつて、サタンはイエスの初臨時にイエスに打ち勝つことができなかった（黙12：1～5）。
 - 1. 次の3つの象徴は創3：15に基づいている（黙12：1、3、5）。
 - a. 「女」（1節）は、イスラエル、ユダヤ民族を象徴している（創37：9～10）。
 - b. 「竜」（3節）は、サタンを象徴している（参照：9節）。
 - c. 「子」（5節）は、メシアを象徴している（参照：詩2：8～9、黙2：27）。

2. 初臨時にイエスを敗北に追い込もうとした（「食い尽くそうとした」）サタンの計略（4 節）
 - a. イエスが荒野とゲッセマネの園で受けた誘惑は、イエスを汚し、この世を治める資格を失わせようとするためのものだった（アダムとエバが受けた誘惑と比較せよ）。
 - b. 実質的な攻撃：ベツレヘムでヘロデが行った虐殺と、後になってユダヤ人たちから受けた拒絶（十字架刑は「勝利」のように見えた = 「かかとかみつく」）
 3. イエスの復活と昇天に、サタンの敗北が暗示されている（5 節「神のみもと、その御座に引き上げられた」は、やがてイエスが王座に就くことを予表している）。
- B. 将来に、サタンはこれまでにない激しさでユダヤ民族を抹殺しようとする（黙 12：12～17）。
1. 大患難時代の中にサタンが戦いに敗れ、サタンが最終的に敗北する時が迫っていることが明らかになる（12：6～12）。
 - a. 70 週目の中間に、サタンは天使長ミカエルの軍勢に敗れる（7～9 節。参照：ダニ 12：1～2）。
 - b. サタンの負け戦（いくさ）が意味するもの（10～12 節）
 - 1) メシア的王国の到来が確実に、しかも間近に迫っている（10 節「今や…現れた」）。
 - 2) 同様に、サタンが最終的にメシアに敗北する時も確実に、しかも間近に迫っている（12 節「自分の時の短いことを知り」）。
 2. それを受け、サタンはこれまでにない激しさでユダヤ民族を抹殺しようとする（黙 12：12～17）。
 - a. イスラエルは備えられた場所に逃れる（14 節。参照：6 節）。
 - 1) **場所**：神によって荒野に備えられた場所（6 節。参照：ボツラ／ペトラ。ミカ 2：12～13、イザ 63：1～5、34：5～8）
 - 2) **時期**：1260 日（6 節）＝ 3 年半（14 節）＝ 70 週目の後半。つまり、避難の時は大患難時代の中間期（参照：マタ 24：15～22、黙 13：5、7、10、ダニ 7：25）
 - b. サタンの攻撃手段は、侵略軍の「洪水」（「שטף」15～16 節。参照：イザ 28：17b～18、ダニ 11：40、26、黙 12：17、13：7、ゼカ 12：2～3、9）

- c. ユダヤ人に対するサタンの戦いで中心的役割を果たすのが、偽メシアとその王国（黙 13：1～2、5～7。参照：ダニ 7：24～25、9：27）

（もしサタンが自分の時間が短いと知っているなら、なぜユダヤ人にむやみに時間をかけるのか。ただ執念深いだけなのか、それともサタンはユダヤ人に関して私たちが知らない何かを知っているのだろうか。）

Ⅲ. 終末時代にメシアの再臨とメシア的王国が実現する鍵は、イスラエルが握っている（創 12：1～3、ダニ 9：24）。

- A. イスラエルを通して、メシアの初臨という祝福と、罪の赦しがもたらされた（創 12：1～5、ガラ 3：8）。
- B. ユダヤ民族全体が悔い改めて信仰の目でイエスを見上げるようになって初めて、再臨とメシア的王国という祝福がもたらされる（ルカ 13：34～35、ゼカ 12：10、ロマ 11：12、使徒 3：19～20）。
- C. そのためサタンは、ユダヤ民族が悔い改めてメシアの再臨を呼び求めるようになる前に、何としてでもユダヤ民族を抹殺しようとする。
- ＊ 過去2千年間、サタンは執拗にユダヤ人の抹殺を図り、「キリスト教徒」の反ユダヤ主義によってイエシュアからユダヤ人たちを遠ざけようとしてきた。

【サタンの目的と策略を知った信者には、どのような役割が与えられているのか。】

適用：サタンの計画を挫き、主の再臨を早めるために、ユダヤ人の救いのために祈り、行動することによってイスラエルを祝福する必要がある。そして、きよさと真理への愛を保ち、自分の証しを立てていく必要がある。

1. イスラエルが直面している現実的、霊的戦いのために祈る必要がある（詩 122：6～8、ロマ 10：1）。
2. イスラエルの救いのために行動を起こす必要がある。個人的な伝道を通して、また他の人々の伝道に「参加」することによって（ロマ 11：12～14。参照：ペリ 1：5）
3. 私たちは、メシアが成し遂げられたわざに依り頼みつつ、どのような場合にも神の真理に従って生き、その真理を宣べ伝えることで、自分の人生の中でサタンに打ち勝つ必要がある（黙 12：11、17）。

セッション3「大患難時代に神が達成しようとする目的」

ノアム・ヘンドレン

通訳：中川健一

概要

1. すべての歴史と預言を貫く神の最終目的は、地上に神の国を打ち立て、イスラエルと全世界を祝福することである（**ダニ 2：44、7：18、27**）。
2. 神が大患難時代に達成しようとしておられる目的：
 - ＊ この世の悪人どもを裁き（滅ぼし）、イスラエルから反逆者を取り除く（**エレ 30：7～11、エゼ 20：33～38、イザ 10：20～23、イザ 24～27 章**）。
 - ＊ ご自分が選ばれた人々を異邦人からも、イスラエルからも召し出し、信仰に導く（**マタ 3：1～12、ダニ 12：1、7、10、イザ 10：20～23**）。
3. 神がご自分の目的を達成される手段：
 - ＊ 直接的または間接的な裁き（ご自分の目的のためにサタンの攻撃を用いることも含む。参照：**黙 17：12～17**）
 - ・ 神は、ご自分の怒りをこの世の悪人どもに注がれる（**黙 6～19 章、イザ 24～27 章**）。
 - ・ 神は、サタンの攻撃を使ってイスラエルのかなくなさを打ち砕き（**ダニ 12：6～7**）、イスラエルにメシアであるイエシュアが自分たちの唯一の希望、救い主であることに気づかせ、その方を仰ぎ見るようにさせる（**ゼカ 12：9～10**）。
 - ＊ 忠実なしもべたちによる大患難時代を通じた宣教活動。それは、悔い改めて信仰に入る人々にイエシュアの福音を宣べ伝えるために行われる。

1. 大患難時代：人類を悔い改めさせるために、神の怒りが全世界に注がれる（**黙 6：15～17、7：14、11：15～18、15：1、19：15**）

A. 7つの封印（**黙 6：1～17、8：1～2**）

1. 6つ目までの裁き：戦争、飢饉、病気、死（6：1～14）
 2. この世の反応：敬虔な人々を迫害し、悔い改めようとしない（6：9、15～17）。
 3. 7つ目の封印：次に来る7つの裁き（8：1～2）
- B. 7つのラッパ（黙8：1～9：21、11：15～18）
1. 6つ目までの裁き：自然界と悪霊の力で、地上と人類の3分の1が減びる（8：6～9：19）。
 2. この世の反応：生き残った人々は、偶像礼拝と不品行を悔い改めようとしない（9：20～21）。
 3. 7つ目のラッパ（3つ目のわざわい）：再臨の前に来る最後の裁き（11：15～18。下記参照）
- C. 7つの鉢（黙15：1、16：1～21）
1. 再臨に備えた最後の裁き（15：1、16：1～21）
 2. この世の反応：神をのろい、悔い改めようとしない（16：9、11、21）。
 3. 再臨が間近に迫っている（16：15～17）
- D. 再臨：神とその民に敵対する勢力とメシアとの戦い（黙19：11～16、**特に15節**。参照：イザ63：1～6、ゼカ14章、エゼ38～39章）

II. 大患難時代を通じて示される神の恵み：その時代に立てられた神の証人たち（マタ24：14）

- A. 14万4千人が、すべての国民に神の救いを宣べ伝える（黙7：3～9、14：4～5）。
1. だれのことか
 - a. 14万4千人のユダヤ人（7：3～8）
 - b. 童貞（14：4～5）

- c. 「神の印を押された」(7:3) — つまり、大患難時代の裁きから守られている(参照:6:16~17)。

2. その働き:世界宣教(7:9、14)

- a. 「しもべ(bondservants)」:その時代にあつて神の御心に仕えている者たち
- b. 働きの結果:全世界で異邦人の大集団が救われる(7:9~14)。

【参照:14:4~6 — 6節は14万4千人の働きを天の視点から見たものか。】

3. その結末(14:1~3):天国で小羊とともにいる(参照:黙4~5章の記述)。

B. エルサレムのふたりの証人(黙11:3~13)

1. だれのことか(11:3)

- a. 意見:エリヤとモーセ、エリヤとエノク
- b. 時期:大患難時代の後半(?)
 - 1) 2節で大患難時代の後半にエルサレムが踏みにじられると言われていることに注目。
 - 2) ふたりの証人に関する啓示は、ラッパの裁きの途中で与えられている。
 - 3) 1260日 = 3年半
- c. 結論:その正体がだれなのかはわからない。

2. その働き(11:4~6)

- a. 「証人」(3節)
- b. 4節。参照:ゼカ4:3~14 — その当時の証人はゼルバベルとヨシュア
- c. エリヤとモーセのような奇跡を行うさまは、イスラエルに悔い改めを呼びかけ、諸国の民を裁いたエリヤとモーセ各人の働きを思い起こさせる(5~6節)。

3. その結末（7～13 節）
 - a. 3 年半の働きの後、エルサレムで獣に殺される（7 節）。
 - b. 3 日半の間、葬られずに人目にさらされた後、復活して天に上る（11～12 節）。
 - c. 結果：裁きと悔い改め（11：13）
- C. イスラエルのレムナント（残れる者）は、「イエスのあかしを保つ」（黙 12：10～11、17、11：13。大患難時代の殉教者一般については、黙 6：9～11 参照）。
- D. エリヤ：イスラエルの民を整え、主の来臨に備える（マラ 3：23～24。新改訳ではマラ 4：5～6）。
 1. バプテスマのヨハネではこの預言は成就しなかった。ただ、その前触れとなった（ヨハ 1：19～23、マタ 17：9～13、11：11～14、ルカ 1：13～17）。
 2. 悔い改めを呼び掛け、イスラエルの民をメシアの来臨に備えさせる（参照：マタ 3 章のヨハネについての記述）。

III. 教会と大患難時代：メシアのからだはこの図式のどこに収まるか？（ヨハ 14：1～3）

- A. 教会の独自性
 1. 教会の始まりと役割：イスラエルが民族的不信仰に陥った今の時代にあってメシアを証しする証人（使徒 2：1～4、1：8。マタ 16：18 の時点では、教会の誕生は将来のこと）
 2. メシアのからだは奥義：ダニエルの 69 週目と 70 週目の間を埋める挿入句（エペ 3：5～6、**10**、マタ 24：14。参照：ダニ 9：26～27）
 3. 70 週目に、証人としての責任がイスラエルに戻される（II. を参照）。
- B. 教会は「神の怒りから救われている」（1 テサ 4：13～5：9）。
 1. 原則：1 テサ 1：9～10 — イエシュアはご自身のからだを「御怒り」（大患難時代の裁き）から救われる（参照：1 テサ 5：9、ロマ 5：9）。

2. 真の信者は、「試練の**時**から守られる」（黙3：10～11）。
 3. 実際：Ⅰテサ4：13～5：4 — 地上に御怒りが下る**前**に教会の携挙が来る。
- C. 終末時代に「引きとめている者」が取り去られることの中には、反キリストが現れる前にメシアのからだを取り去られることも含まれている（Ⅱテサ2：1～13）。
1. この世の罪を引きとめる聖霊の力が取り去られる（2：6～7。教会を通して引きとめる力が働いている。マタ5：13を参照。ノアの時代については創6：3を参照）。
 2. 注記：大患難時代を描写した黙示録6章～19：6には、教会という言葉が一度も出てこない（「選ばれた者」、「聖徒」という言葉は、ダニエル書やマタ24～25章にあるように、**イスラエル**の忠実な者たちを指す）。

結論

自分にはわざわざいが降りかからないから、安心してのんびり暮らしていればよいのでしょうか。とんでもない！ やがて来る怒りから他の人たちも救われるように、これまで以上に励み、福音を伝えていこうではありませんか。

まとめ

中川健一

I. 再臨が事実だとするなら、なぜそれは遅れているのか？

1. キリストの3つの役割

①預言者（初臨）、②祭司（現在）、③王（再臨）

2. 聖句

「キリストの来臨の約束はどこにあるのか。父祖たちが眠った時からこのかた、何事も創造の初めからのままではないか」（Ⅱペテ 3：4）

「主は、ある人たちがおそいと思っているように、その約束のことを遅らせておられるのではありません。かえって、あなたがたに対して忍耐深くあられるのであって、ひとりでも滅びることを望まず、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです」（同 3：9）

II. 再臨の条件は何か？

1. イスラエルの民の回心が再臨の前提条件である。

2. 聖句

「わたしは、ダビデの家とエルサレムの住民の上に、恵みと哀願の霊を注ぐ。彼らは、自分たちが突き刺した者、わたしを仰ぎ見、ひとり子を失って嘆くように、その者のために嘆き、初子を失って激しく泣くように、その者のために激しく泣く」（ゼカリヤ 12：10）

①イスラエルの清め（13章）、②メシアの再臨（14章）、③メシア的王国の確立（14章）

「ああ、エルサレム、エルサレム。預言者たちを殺し、自分に遣わされた人たちを石で打つ者。わたしは、めんどりがひなを翼の下に集めるように、あなたの子らを幾たび集めようとしたことか。それなのに、あなたがたはそれを好まなかった。見なさい。あなたがたの家は荒れ果てたままに残される。あなたがたに告げます。『祝福あれ。主の御名によって来られる方に』とあなたがたが言うときまで、あなたがたは今後決してわたしを見ることはありません」（マタイ 23：37～39）

III. 再臨を待ち望む生き方とはどのようなものか？

1. 聖句

「しかし、私たちは、神の約束に従って、正義の住む新しい天と新しい地を待ち望んでいます。そういうわけで、愛する人たち。このようなことを待ち望んでいるあなたがたですから、しみも傷もない者として、平安をもって御前に出られるように、励みなさい」（Ⅱペテ 3：13～14）

2. 再臨を論じることの意味

- (1) 再臨を論じること、今を生きるための力となる。
- (2) 再臨を論じること、神の人類救済計画の全貌を理解することにつながる。
- (3) 再臨を論じること、日本の覚醒とユダヤ人の救いのための祈りにつながる。

賛 美

「世の終わりのラッパ」(聖歌 683/旧 634)

- 1 世の終わりのラッパ 鳴り渡る時
世は常世（とこよ）の朝となり 救われし者は
四方（よも）の隅より 全て主のもとに呼ばれん
その時我が名も その時我が名も
その時我が名も 呼ばれなば必ずあらん
- 2 その時眠れる聖徒 よみがえり
栄えのからだに変わり われらも共に
携え挙げられ 空にて主に会いまつらん
その時我が名も その時我が名も
その時我が名も 呼ばれなば必ずあらん
- 3 世の業を終えて 天（あま）つ憩（いこ）いに
招かるる日近ければ なおも主の愛を
世びとに語り 御栄えのために尽くさん
その時我が名も その時我が名も
その時我が名も 呼ばれなば必ずあらん

「驚くばかりの」(聖歌 196/旧 229)

- 1 驚くばかりの 恵みなりき
この身の汚れを 知れる我に
- 2 恵みは我が身の 恐れを消し
任（まか）する心を 起こさせたり
- 3 危険をも罨をも 避け得たるは
恵みの御業と 言うほかなし
- 4 御国に着く朝 いよいよ高く
恵みの御神を 讃えまつらん

「輝け主の栄光」(リビングブレイズ 110)

愛の光 かがやき
 暗闇を 照らしだす
 わが主イエス 世の光
 自由を与える ちから
 いのちの みことば

輝け 主の栄光 地の上に
 こころを 燃やしたまえ
 あふれよ 主の恵み あわれみ
 この地を 生かしたまえ

「みくにに住まいを」(聖歌 687/旧 638)

- 1 御国に住まいを 備え給える
 主イエスの恵みを 誉めよ讃えよ
 やがて天にて 喜び楽しまん
 君に見(まみ)えて 勝ち歌を歌わん
- 2 浮世のさすらい やがて終えなば
 輝く常世(とこよ)の 御国に移らん
 やがて天にて 喜び楽しまん
 君に見(まみ)えて 勝ち歌を歌わん
- 3 諸共(もろとも)勤(いそ)しみ 励み戦え
 栄えの主イエスに 見(まみ)ゆる日まで
 やがて天にて 喜び楽しまん
 君に見(まみ)えて 勝ち歌を歌わん
- 4 目標(めあて)に向かいて 馳(は)せ場を走り
 輝く冠(かむり)を 御殿(みとの)にて受けん
 やがて天にて 喜び楽しまん
 君に見(まみ)えて 勝ち歌を歌わん



無断複製・転載を禁じます